

タイトル 「研究発表」

講演者 麻溝台高等学校 生徒

学校名 麻溝台高等学校

講演テーマ 「自転車の交通事故をゼロにするための現状と改善策」

1 はじめに

麻溝台高校は「自転車の交通事故をゼロにするための現状と改善策」について話します。

全体の構成としては現状分析、麻高生の思う登下校の危険な行為について、それらの改善策、全体のまとめの順で話していこうと思います。

2 現状について

まずは麻高の現状です。こちらの2つのグラフをご覧ください。

これは家から学校までの通学手段を聞いたもので右側は登校時間を聞いたものです。このグラフから分かることは、現在の麻高では約9割の人が自転車で登校しているということ、15分以上かけて登校する人が8割いるということです。

登下校で合わせて1日の中で30分から1時間前後自転車で乗っていると考えると、普段から麻高の生徒が事故に遭いやすい、起こしやすい状況にあるということがわかると思います。

続いて、高校に入学してから交通事故に遭ったことがあるかを聞きました。

グラフを見ればわかるように、事故の大小関係なく15%の人が事故に遭ったことがあるということがわかりました。数字で表すと100人以上いるということになります。先程事故に遭いやすい、起こしやすい状況にあると言いましたが、実際に事故に遭った、起こした人が大勢いるというのが麻高の現状だと言えます。麻高生は登下校でどんな行為が危険だと感じているか。

今お話しした現状とつながるのですが、自転車で登下校している生徒たちに「普段の登下校で「危険だな」と思うような場所、行為はありますか」とアンケートを取りました。

その中の回答で多かったものは並走、一時停止をしないこと、イヤホンの着用、場所では信号のない十字路が多くあがりました。

まずは並走についてです。

写真は麻溝台高校の目の前の通りのものです。写真を見てもらうとわかるように歩道がとても狭く実際

に走ると、自転車が2台横並びになったら道が塞がるほどです。道が塞がれているような状況なのに前から自転車は普通に来るので接触事故が多いポイントでもあります。また、前の自転車がギリギリで車よけのポールを避けた時など、それに反応できずポールと正面衝突してしまうと言った事例もあります。

続いて一時不停止、信号のない十字路についてです。写真はこれも麻高の周辺で右側が麻高のグラウンドになっています。この道も危ない場面を何回も見かける場所で朝の時間帯になると、左側は麻高生で右側は手前側にある北里大学に行こうとする人達と多くの自転車がある状況ができて車も通るのですが列が切れるタイミングで交差するポイントに行く生徒が非常に多いです。自転車や車が途切れたから来ないだろうと思いついで事故に遭うケースが多いです。麻高周辺はこのような道路が多いので、注意が必要です。

四つ目のイヤホンについてですがこちらのグラフをご覧ください。

グラフ上では着用している人は2割程度になっていますが寄せられた数からいくと明らかに2割程度を超える多さでした。数字以上に着用している人が多いのではないかと考えています。

ヘルメットについても話したいと思います。

現在の麻高の着用率はグラフの通りとても低いです。特に2、3年生で着用している人はとても少ないです。1年生は数こそ少ないですが割合的には多いように感じます。調査した理由としてはダサいからや法律的に大丈夫、特に多いのは周りがつけていないからというのが大きいということがわかりました。

3 改善点

イヤホン着用者を減らすためには新しい法律の周知が大事だと考えました。

少なくとも良いことではないとわかっていると思うので、罰金としてこれくらい取られますと言ったものを全体に口頭で言うのではなく、駐輪場に掲示できたりすると効果は高いのではないかなと思いました。

ヘルメット着用者を増やすためにはデータの可視化が大事だと考えました。このグラフのようにヘルメ

ットを着用しているかどうかでの致死率といった情報だけでなく今回出した着用率を学年やクラス別で掲示したりして数字が見えることで生徒も意識するのではないかと私たちは考えました。

また自転車ヘルメットのデザインが最近ではこのような帽子に似た形のものも多く普及してきているということを伝えることで、ヘルメットを被ることに対する抵抗を少しでも減らせるのではないかと考えました。

4まとめ

自転車で登校する人がほとんどの麻高では生徒一人ひとりの安全意識を高めることが必要であり、事故を他人事ではなく、自分事として捉えてもらえるような取り組みを今後おこなっていく必要があると分かりました。

タイトル 「研究発表」

講演者 相模原中等教育学校 生徒

学校名 相模原中等教育学校

講演テーマ 「通学路における生徒の安全指導」

私たちはまず昨年度の研究の振り返りから始めました。昨年度のテーマは「通学路における自転車の危険性とその改善策」でした。このテーマで研究をした理由は通学路において、生徒と自転車の接触事故あるいは事故になりかねない場面が多発していたためです。実際に昨年度実施したアンケートでは約4割の生徒が「自転車を危険であると認識したことがある」と回答しました。

研究の結果、自転車に乗る人は車を恐れて歩道を走っているため歩行者との接触が起りやすいという結論に至りました。

私たちはこれらの昨年の結果を踏まえ、再度現状の分析から始めました。まず「自転車に乗る人は車を恐れて歩道を走っている」という昨年の考察を検証するために実際に通学路を自転車で走行してみました。

その感想がこちらです。通学路は自動車の交通量が非常に多く、大型車両も頻繁に通るため、自転車で車道を走行するのはかなり緊張感がありました。それに比べ歩道の走行は大きな安心感がありました。車道には自転車専用レーンが設けられていますが、歩行の方が走行しやすいと感じました。

この結果から私たちは自転車に乗る人に車道を走行してもらおうという当初の計画は実現が難しいと判断しました。一方で学校には頻繁に地域の方々から「生徒が広がって歩いていて通行しづらい」という声が寄せられていました。私たちはこれを受け歩行者の方にも改善する余地はあるのではないかと考えました。

これらのことを受け、私たちは今年度の研究テーマを「通学路における生徒の安全指導」に設定しました。

続いて通学路の考察を行いました。相模原中等教育学校は中高一貫校であり、相模大野駅からの通学路での混雑を避けるため、スライドの地図のように中学生に当たる前期生と高校生に当たる後期生で通学路が分けられています。

しかし学校に到着する少し前で2つの通学路が合流するため、そこで混雑が発生してしまいます。

特に朝や夕方のピーク時には生徒が完全に道をふ

さぐ場面も多くあります。これは単に通行する生徒の数が多いののも一つの原因ですが、横に広がって歩く生徒が多いのが大きな原因だと考えられます。このことから、私たちは課題を解決するため、生徒に道をふさがないように呼びかけることにしました。

具体的に二つの取組を計画し実行しました。一つ目は「通学路の特に混雑するエリアにポスターを掲示する」二つ目は「各クラスの朝会にて注意喚起をする」です。

一つ目の「ポスターの掲示」に関してはスライドのようなポスターを作成し先述の特に混雑するエリアに掲示しました。ポスターにはピクトグラムや相模原中等教育学校のマスコットキャラクターである「中等バク君」を使用し生徒に伝わりやすくなるように工夫しました。

二つ目の「各クラスの朝会での注意喚起」に関しては、本校の交流委員会に協力してもらい、各クラスの朝会で通学路を広がって歩かないよう呼びかけました。

そしてこれらの活動を行う前と後で広がって歩く本校の生徒の数を集計し比較しました。

調査日時は平日の朝8時10分から20分の10分間で活動の前後でそれぞれ3日間行いました。調査はほとんどの生徒が利用する通用門の前で行い、すべての通行した生徒の数と、3人以上に広がって歩いていた生徒の数をそれぞれ集計しました。

こちらが調査結果です。

活動が直接的な要因になったとは断言できませんが、広がって歩く生徒の割合が30%から16%と14%減少、3日間の広がって歩く合計人数も156人から87人と69人減少しました。

総括です。まず計画をたて実行できたこと、一定の成果を確認できたことは評価できます。しかし計画を立てるのに時間がかかり、十分なデータを集められなかったのは反省すべき点です。今後は課題を改善していきながら、地域の駐輪場や警察との協力も模索していきたいと考えています。

タイトル 「研究発表」

講演者 相模原城山高等学校 生徒

学校名 相模原城山高等学校

講演テーマ 「自転車シミュレーターから考える安全な登下校」

本日は自転車シミュレーターから考える安全な登下校というテーマで日頃の交通安全に対する私たちの気づきと今後の取り組みについて発表させていただきます。まず皆さんに伺います。ヒヤリ・ハット体験をしたことはありますか？私はあります。弟と一緒に自転車に乗って出かけていた時のことです。遊びに向かう途中に段差にタイヤを取られ、道路に転んでしまいました。そのとき、走っている車と接触しかけました。今でも恐ろしい気持ちになります。この様なヒヤリ・ハットは多くの方が経験されていることと思います。

私たち高校生にとって、自転車は最も身近な移動手段であると同時に、最も危険なリスクの一つです。特に登下校中は慣れた道だからこそ注意力が散漫になりやすい時間帯です。この問題意識から私たちは自転車シミュレーターを体験し、安全意識の再確認を行いました。

私が体験したのはこちらの自転車シミュレーターです。実際に体験した様子をご紹介します。一つ目は自転車シミュレーターに乗っている映像、二つ目は映像を見て交通安全が守られているか判断する体験です。

私は普段自転車に乗ることはあまりありません。しかし、今回の体験を通して、改めて自転車の交通ルールを確認することができました。この体験から私自身、後方の確認がおろそかになっていることに気がつきました。私はこの体験を活かし、自転車に乗るときや、走行するときは前方だけでなく、後方、左右の確認を徹底することにしました。実際に体験してみて重要なことに気がつきました。

シミュレーターでは慣れない操作や初めての道であることから、いつもより、慎重な運転になりました。しかし、この体験から、普段から慣れている通学路等では私たちの気が緩んでいるのではないかと感じました。この気の緩みこそが事故の元になりかねない、危険な要素だと感じました。

慣れた通学路に潜む危険な要素を探すため、高校周辺の道路を確認しました。視界の悪いカーブや、複雑

な交差点など、改めて危険箇所を実感しました。「止まれ」の標識がどうしてそこにあるのか、それはその場所が事故につながりやすいポイントだからだと思いましたが、標識を無視することなく自転車を運転しようと強く思いました。

自転車事故の主な原因は交通ルールの未遵守によるものが多いです。ではどうすればこの気の緩みに打ち勝ち、安全を確保できるのでしょうか。特別なことは必要ありません。一人ひとりができることはシンプルだと思います。登下校前にブレーキ・ライト・ベルの確認をすること。スマホ、イヤホンの禁止を徹底すること。特に交差点では、“止まる、見る、待つ”を徹底すること。無理な追い越しはしないこと。これらの基本的な取り組みを普段から実施することが事故防止につながるのではないのでしょうか。

相模原城山高校では、交通安全を重点的に指導しています。生活見直し週間では、学校付近の危険箇所の立ち番指導を実施しています。プロのスタントマンによる交通安全教室も実施しました。津久井警察署やまちづくりセンターとも連携し、共同交通安全啓発デーとして合同で立ち番を行っています。

新たな取り組みとして通学路危険マップの作成を提案します。交通安全委員が主催となり、このマップを作成し各クラスで掲示することで生徒一人ひとりが通学路の危険箇所を再認識し、気の緩みを防止する意識付けを行いたいと考えています。

標識を守る、信号機を確認する、周囲の安全を確認して走行する、当たり前のことですが、その当たり前ができなかったときに事故が起こるのだと感じました。事故が起こってからでは遅いです。

今の私たちが気をつけることで交通安全を身近な人たちに広めることにより、多くの人たちを助けるきっかけになると考えます。自転車の安全も特別な技能が必要なのではなく、地道な受容、選択、変容という日々の積み重ねによって築きあげられるものだと確信しています。